

まえがき

中尾正義（総合地球環境学研究所）

先日、兵庫県三木市の三木北高等学校の生徒さんが主催した「環境シンポジウム 2007」に招かれて、参加してきました。あの三木かなあ？と思いながら行ったのですが、そうでした。「あの三木」というのは、三木城があった三木かなあ、という意味です。三木城は、羽柴秀吉が毛利攻めのために西に向かった折に、城にこもる敵を攻めあぐね、土木工事をして周囲の河水を城の方に引き込み、一種の水攻めをして落としたり、という話が残っている城です。

シンポジウムでのわたしの話は当然ながらオアシスプロジェクトに関してですから、三木城の水攻めの話はまくらに使いました。カラホトの場合は、水攻めは水攻めでも全く逆で、水の手を切るという手段で攻められ、落城したという伝説が残っているからです。

ところ変われば品変わる。ある場所では有効な手段も別のところでは別の方法を探らなければいけない、という例としてひいたわけです。

学問の世界でも、ある分野のやり方あるいは作法が、別の分野でもそのままのやり方でやればよいとは限らない、ということを実感した 6 年間でした。それぞれのやり方や知識を組み合わせない限り、単独のどの分野でいかに先端的成果を挙げようとも、それだけではどうしようもない、ということ、プロジェクトの開始前に思っていた以上に感じた 6 年間でもありました。

本号は、オアシスプロジェクトの結果を中心として編集される最後の号になると思います。しかし、当初のもくろみ通り「オアシス地域研究会報」はイリプロジェクトに引き継がれ、今後も出版は継続されます。引き続く号にはイリプロジェクトの成果が主として掲載されるでしょうが、オアシスプロジェクトの成果も掲載されることになろうかと思えます。プロジェクトにまたがって、それぞれの専門領域のインターフェイスの役割を果たしてくれるものと期待しています。

今後とも、異なる分野の情報交換誌として「オアシス地域研究会報」が発展することを祈念して・・・